

平成25年度第3回図書館協議会会議録

日 時：平成26年3月14日（金）13：30～15：05

会 場：市立図書館 会議室

出席者：（委 員）乙犬会長・近藤委員・畠山委員・宮川委員

・平井委員・清水委員・宮崎委員

（事務局）寺崎教育部長・橋場次長・内藤課長・谷口主査

・真板主査・黒氏主査・森本主事

（傍聴人）千歳民報記者金子

1. 開会

2. 挨拶

会 長：平成25年度最後の協議会となる。平成4年に恵庭市立図書館して20年以上が経った。今日まで、市の社会教育行政の大きな柱立てとして、非常にめざましい働きをしてきた。協議会委員は市民の立場から、図書館の運営について意見や要望をしてきた。最近では、恵庭市の図書館活動が全国的にも注目されており、非常に嬉しく思う。このエネルギーとさらに結集して、より良い図書館活動を進めていきたい。今日は特に、読書活動推進計画案の具体的な報告があるようなので、どうぞ忌憚ない意見をいただきたい。よろしくお願いします。

事 務 局：本来だと寺崎教育部長、図書館長を兼務している部長から挨拶申し上げるところだが所用により欠席のため、代わって教育部次長出席する。よろしくお願いします。今回は今年度最後の協議会。委員の2カ年の任期でも、最後の協議会となる。ご協力ご審議にお礼申し上げます。この2年間は図書館にとってはかなり濃い2年間だった。一昨年20周年から、読書条例、その記念事業と、数々の事業を展開してきた。その間協議会委員の方々にはさまざまなところでご協力いただき、この場を借りてお礼申し上げます。本日の図書館協議会は、恵庭市読書活動推進計画の素案の審議。前回、素案の叩き台を示したが、もう少し具体的になっている。この計画については、今後10年間、図書館の活動、読書活動についての指針となるので、本日は皆さまの意見をいただきながら、先々につながる計画にしていきたい。本日はよろしくお願いします。

3. 議題

次第に基づき内藤課長より次のとおり説明

1) 恵庭市読書活動推進計画素案について

会 長：目標指標（P.25）のところで、雑誌の数を増やす、一人当たりの蔵書冊数も増やすとい

うことで、全体的に資料を増やしていくということだが、収蔵するスペースはあるのか？

事務局：P. 24 の 38 の事業番号にも書いているが、現状では今の 4.07 冊という冊数が限界に近い数値。4.5 冊にするためにはやはり書庫の増設が必要なので、計画にも書いています。

会長：書庫の増設とは、具体的にはどういうことか？

事務局：これから 10 年かけて、予算、場所等の検討を進め、実現に向けて取り組みたい。

会長：今の施設の中にスペースはあるのか？

事務局：今はない。現状は今の冊数が上限に近く、これ以上の本の収容をするのは非常に難しい状況。

委員：P. 17 の 9 番の保護者・ボランティアとの連携による読書活動推進ということがあげられているが、学校ボランティアの活動母体は保護者の方で、子供が卒業すると活動から離れていく。自分の場合は子供が卒業した後も 6、7 年通い続けているが、だんだん活動する人数が減っているように思う。アンケートの結果でも読み聞かせは高く評価されている。保護者が子育てや仕事で暇がない場合に、一回卒業してある程度落ち着いた O B が戻って来やすいような環境を整えると読み聞かせをする機会が増えるのでは。

事務局：ボランティアの数の確保は非常に難しい。学校は卒業してしまうと終わり、新しい人をどんどん育成していくのは非常に困難。いくつかの小中学校ではボランティアが毎年出てくると聞いている。各学校のボランティアや保護者への呼びかけによって、年々増減がある。各学校が、地域支援ということで地域の方たちの力を活用する教育をするかどうかに関わってくるのでは。PTA だけで組織したいという学校と、地域の方も含めて組織したいという学校とがある。図書館では、まず先に子供の読書活動の充実という観点から、研修会や人の育成・支援を図っていきたい。

事務局：年 1 回、交流会・研修会の場を設けて話を聞いているが、なかなか手がないというのはどこの学校も共通の問題。意見を取り交わしてはいるが、実際に実を結ぶような案はなかなかない。今後交流会の場を広げて学校で取り組んでほしいと考えている。

委員：読み聞かせがハードルが高いという風に考えている父兄が多いのではないかと。家庭で自分の子供に読み聞かせるのと変わらないということを PR するのもひとつの手。もうひとつは、年寄りの読み聞かせボランティアを、小中学校のボランティアにする仕組みを構築するといったのでは。

事務局：そのように進めていくための計画だと認識している。

会長：年寄りの方が多くなってきますからね。

委員：学校でどのようにボランティアが位置づけされているかは学校によって違うし、それを預かる校長によってかなり違う。現場でよく聞くと、声掛けをしてボランティアを引き継いでいく形が一番多い。仕事をしている人はまったくそういう場に触れないので、いかに多くの父兄が読み聞かせの場を見る機会を作るかも大変大事だと思う。参観日のときに読み聞かせをするなどの機会を増やさないと底辺拡大はできない。学校

側と連携していかないと、いつまでも今いるボランティアが苦勞しながら後輩を育てていくことになる。

委員：学校もすべてを行うことはできない。保護者には伝達する必要があるので、さまざまな形で紹介はできる。保護者以外のところは普段接する機会があまりないので、市のHPなど全体が見るところで広報していただきたい。なかなか手が少ないというのは事実なので、地域の方、保護者以外の方、OBを含めて、力を借りられればと思う。

委員：見るのは楽しいが、自分ではしたくない人も多い。

委員：やってみようと思う方と、私には無理と思う方がいる。ある程度経験して離れていた方が戻ってくるのが入りやすい。もしくは地域のお年寄りの方や現役を離れた方が入ってくると違う。

委員：やろうと思っている人は潜在的にいますが、なにかきっかけを待っているのでは。

委員：やろうと思った時に学校に問い合わせるのはすごくハードルが高いと思う。本を借りたついでに、募集案内があれば、一步のとっかかりは低いと思う。

事務局：問題・課題があるのは十分承知しているので、今聞いたことを参考にこれから取り組み進めていかなければならない。一番大事なのはボランティアが楽しいことをやっているという気持ちを抱き続けられるような場面を提供して、体験してもらうこと。受け入れ先の学校との連携も取りながら進めていく必要もある。

会長：基本理念「本と出会い、人と出会い、つながり広がる読書のまち 恵庭」のキャッチコピーは非常に心をつかむいい言葉。本を読むのは個人でできるが、本を読むことを通じて、人と人とがつながっていくというのは大変優れた視点。そういう場作りの推進が進んでいけばいいと思う。

委員：P. 18 の全国学力学習状況調査で小学校児童の目標が出ているが、全国的にはどの程度なのか？

事務局：小学生が、北海道で73.5、全国で72.6。恵庭市は79。中学生が、北海道が72.7、全国で69.7。中学生は全国と比べると恵庭市は10ポイントほど高い。

会長：P. 25 目標指数の雑誌タイトルを178から220するというのは、具体的にどんなジャンルの雑誌を入れるイメージなのか？

事務局：雑誌は要望が高い。声を拾い上げて、恵庭市民の要望に応じて入れていきたい。

会長：一人あたりの蔵書冊数が4.07から4.5は少ない感じがする。

事務局：恵庭市民が7万人ほどいるので、0.5増やすだけでも35,000冊ほど増える。

委員：P. 10 の最初の「誰もが」が抜けたと言っていたが、P. 1 は入っているが統一しなくていいのか。

事務局：文書の言い回しからこちらだけ抜いたが、事務局で検討します。

委員：10. キャリア教育の具体的な見通しは？

事務局：中学生の職業体験の受け入れなど、体験事業の推進などを考えている。高校も職業体験で図書館に来るので、同じ職場体験であれば統一してキャリア教育ということに。

会長：具体的には小中学校ということだが、一般の人に対してはないのか。

事務局：基本方針１「主体的な読書活動の実践」で書くべきなのだが、一般の人は含まれていない。全体に謳っているという形になる。

会長：何年も前に、ビジネス支援として取り組む話もあった気がするが。要望はないのか？

事務局：今まで目標として掲げたことはない。通常の業務の一環でビジネス書も集めている。必要ということであれば検討する。

会長：ニーズの問題もある。一人でも要望があれば、その背後にたくさんいるのでは。

事務局：いろんな趣味や事業に必要なことということで、幅広い資料も収集して、レファレンス全体をまとめて表現している。たとえばガーデニングで１項目設ける等、いろいろ案はあったが、きりがないと判断した。

委員：総合的な学習の時間は、今はどうなっているのか。

委員：時数は減ったが残っている。

会長：レファレンスサービスの充実と促進は、ニーズや相談はあるのか？

事務局：本の所在をたずねられるのも１回と数えると、平成２５年度は、年間２５，１８１件の相談を受けており、件数は増えている。

事務局：読書相談や問い合わせも含んでいるが、子どもたちからも難しいレファレンスを受けることもある。

会長：活動団体を３９団体から５０団体まで増やすというのは、具体的なイメージはあるのか。

事務局：増やしたいと考えているが、高校や大学、町内会へ拡充していく中で、今後連携していく幅はある。連携しているところはしっかり連携し、幼稚園などの連携が少ない部分をもう少ししっかりと活動団体数に加えられるような取り組みにしていければと考えている。

会長：幅広い年齢層の読書活動を考えているのであれば可能性はあると思う。

事務局：老人クラブなど、今まで関連していないところも視野に入れて、連携を増やしたい。

会長：高校はどうか？

事務局：高校は道立で、市の管轄ではないので、連携は難しいところ。目標のひとつだが、北高校が朝読書をはじめて、読書活動の連携が進んでいる。せっかく恵庭で読書習慣を身につけたのだから、高校へつなげて確かなものにしていきたい。明確な目標をもつには高校は不可欠と考えている。

会長：蔵書数が増えた場合、現在のスペースである程度工夫して収納できる可能性はあるのか？

事務局：構造が特殊なので、増築は難しい。別の建物を建てるのか、収納施設で遊んでいるスペースにしまうのか、１０年間かけて検討いくというイメージ。

会長：本館は建築としても有名だから仕方ないが、分館はどうか？

委員：島松分館は改築が必要な時期では？

事務局：島松地区の駅前整備の中で、公共施設を複合するという案も出ている。今の島松分館は旧郵便局で昭和３０年代に建築されたものなので、改築という話にはならないのでは。駅前整備の中でどういう図書館に位置づけていくかということになる。

- 会 長：空き家を利用するというのはどうか？
- 委 員：書庫は保存性がなければならぬので難しいのでは。書庫の増設ということは、開架スペースを増やすということでは考えていないのか？
- 事 務 局：1人あたり4.5冊の蔵書を収納できるということと一緒に考えている。捨てる数を減らせばすぐに収納場所が必要になってくる。
- 事 務 局：図書館をどのように配置していくかを考えるのが基本。管理の問題もある。いろんな面から考える必要がある。
- 委 員：蔵書として登録してあるもの以外は除籍になるが、中間みたいな存在はどうか？ 除籍でもピンからキリまである。正規の蔵書ほどではないが管理しておくなど、段階を設けて増やせばいいのでは。
- 事 務 局：本を増やししながら、廃棄のレベルをどうするかも話し合うべき。
- 会 長：月刊誌は資料性もあるが廃棄しているのか？
- 事 務 局：雑誌は一誌一誌保存年限を設けて保管してある。除籍分はまず道立図書館に寄附し、残りをリサイクルしている。
- 委 員：大家文庫は、雑誌の目次で検索できるようになっている。目次で検索できないと雑誌は資料としては扱いが難しい。
- 事 務 局：雑誌は図書として扱わないため、人あたりの蔵書冊数の目標値に入っていない。発行形態が多いので、増やさないようにしているが、必要なバックナンバーは国立図書館から借りている。
- 事 務 局：最近はデータベース化されていて、記事検索もできるようになっている。全バックナンバーを保存しておくのは難しい。
- 委 員：レファレンスサービスの中でもそういうことができるというのをもっと周知していく必要がある。
- 会 長：要覧見ると、蔵書冊数は年々増えているようだが。
- 事 務 局：購入約10,000冊に対し、除籍約5,000冊のため。
- 会 長：素案は計画を前半と後半に分け、5年経ってから見直すという考えなのか？
- 事 務 局：前半は平成26年～30年としていますが、29年頃から見直しはしていかなければと考えている。整合性や進捗状況をみてやっていきたい。

4. 報告

次第に基づき次のとおり報告

・谷口主査より

1) 平成26年度図書館関連予算について

5. その他

(15時05分 終了)